

榛南地区のサガラメ、カジメ群落の復活を目指して —藻食性魚類アイゴの捕獲に取り組んで—

坂井平田漁業協同組合青壮年部
副部長 森田 和利

1. 地域および漁業の概要

榛南地区は静岡県のほぼ中央部の南端に位置している(図1)。東部は駿河湾に、南部は遠州灘に接し、約 50km におよぶ海岸線を擁する風光明媚なところである。

榛南地区には御前崎、地頭方、相良町、坂井平田、吉田町の 5 つの漁業協同組合があり、正組合員 1,287 名、准組合員 2,578 名からなる。漁業の種類は遠洋から沿岸まで多岐にわたり、沿岸漁業では一本釣、刺網、シラス船曳網、小型定置、採介藻が主体となっている。

また、当地区は獲る漁業だけでなく栽培漁業についても関心が高く、昭和 62 年に榛南地域栽培漁業推進協議会を組織し、ヒラメ、マダイ、トラフグ等様々な魚種の種苗放流や中間育成などに積極的に取り組んでいる。

2. 研究グループの組織と運営

私達坂井平田漁協青壮年部は昭和 37 年に結成され、現在の部員は 13 名で、サガラメ、カジメ等の復活に向けた取組みや、榛南地域栽培漁業推進協議会を中心とした栽培漁業への取組みに積極的に参加しているほか、先進地の漁業視察勉強会などを行っている。

3. 研究、実践活動課題選定の動機

榛南地区における採藻漁業の歴史は古く、当地区相良町の名前が由来となったサガラメ漁は平安時代から行われ、冬場の重要な収入源として全組合員の約 8 割が従事する主要漁業であった。しかし、昭和 60 年頃から海藻が枯れ、藻場がなくなる「磯焼け」が発生し始め、まず地頭方でサガラメの漁獲量が減少しはじめ、平成 3 年頃からは坂井平田でもサガラメの漁獲量が減少しはじめた。現在では、当地区の海藻群落のほとんどが消滅してしまっている。磯焼けの進行に伴い、これらの海藻類を餌とするアワビも激減し、磯焼け発生以前は 20 トン近かった漁獲量は 5 トン以下にまで落ち込んだ(図2)。

このような状況の中、サガラメ、カジメ群落の保存と復活を目指して「榛南地域磯焼け対策推進協議会」が平成 8 年に発足したが、私達青壮年部では協議会発足以前から、サガラメの養殖試験を行うなど海藻群落復活への取組みを積極的に行ってきた。

サガラメ養殖を行う際、早春にサガラメを沖に出して養成すると、数ヶ月は順調に成長するものの、毎年夏になるとちぎれたり、短くなった葉が目立ち始め、9 月頃には茎だけになったり、枯れてしまうという状況が何年も続いた。

その後の水産試験場の調査の結果、夏以降葉が短くなったり、茎だけになるのは藻食性の魚アイゴによる食害が原因であり、この食害を防がなければ海藻群落の復活は望めないことなどがわかった。

アイゴ(図3)はその独特の磯臭さから、本県では「ねしょんべん」「猫またぎ」と呼ばれ、ごく一部の地域を除いて食習慣はなく、商品価値は極めて低い。また、ひれに毒があるため榛南地区では網にかかってもそのまま海に捨てるような魚で、漁獲による数の減少はほとんど望めない。そこで青壮年部では、海藻群落復活のために刺網や定置網によるアイゴの捕獲に取り組むことにした。

4. 研究、実践活動状況及び効果

(1) 刺網での捕獲

平成 12 年は青壮年部員が中心となり、カジメの移植を行っている海域周辺に当番制で刺網を仕掛けてアイゴを捕獲した。平成 13 年は青壮年部員以外のエビ網、刺網漁業者にも協力を依頼し、対象海域を移植海域周辺から榛南地区全体に拡大して、捕獲の効率化を図った。

(2) 定置網での捕獲

榛南地区には定置網が4か統あり、例年 5 月下旬頃からアイゴが網に入る。これまではアイゴは商品価値がないうえ、ひれに毒があって取り扱いが難しいので、そのまま海に戻していたが、陸に揚げることにした。

(3) アイゴ捕獲の成果 (図4)

平成 12 年は刺網では、7~11 月に約 160kg のアイゴを捕獲し、定置網では、6~8 月を中心に 4 トン弱を捕獲した。平成 13 年は、青壮年部以外の漁業者の協力もあって、刺網では前年の約 10 倍にあたる 1.5 トン、定置網では約 3 トンを捕獲した。

アイゴ1尾を 300g 程度とすると、平成 12,13 年の 2 年間で約 9 トン、30,000 尾のアイゴを捕獲したことになる。

(4) アイゴ捕獲後の養殖サガラメの変化

平成 7 年からの試験開始以来、一度も秋を越すことができなかった養殖サガラメだが、平成 13 年は、深いところのサガラメを中心に食害を受けなかった個体が多く、食害を受けた個体からも新しい芽がでてきていることが確認され、収穫及び出荷が現実視されるまでになった。

(5) アイゴ捕獲後のカジメ群落の変化

捕獲を行う以前は、カジメの母藻投入や移植によってカジメ群落ができて、食害が最も強くなる夏~秋を越せず、11 月頃には群落は消滅していた。

ところが、捕獲後の平成 12 年は、食害により葉が短くなっているカジメもあったが、小さいカジメ群落を 1 年間維持することができた。さらに、維持した群落のカジメから胞子が落ち、そこから新しいカジメが生えていることも確認された。平成 13 年は、夏場の台風の影響でカジメの本数は前年より少なくなるという被害はあったが、葉はたくさん残っており、食害が前年より明らかに少ないことが確認された。また、場所によっては磯焼け以前の榛南の海を思わせる立派なカジメも多数確認できるなど、群落は前年以上の良い状態のまま冬を迎えることができた。

5. 波及効果

今回青壮年部を中心にアイゴを積極的に捕獲するとともに、磯焼けについて漁師仲間

話しをしていくうちに、榛南地区の漁業者全体が、磯焼けや自分たちの生活の場である海の環境等について関心を持つようになった。また、海藻群落回復のための手段としてアイゴなどの藻食性魚類の捕獲が有効であることが確認できた。

6. 今後の課題

1 番の課題は捕獲したアイゴの処理方法である。平成 13 年には、食習慣のある沖縄県へ定置網で水揚げされたアイゴの一部を試験的に出荷してみたが、コストの問題もありうまくいかなかった。一方、アイゴを刺身、フライ、干物などに加工して簡単な食味試験を行ったところ、アイゴ独特のくさみにより不評なものもあったが、フライ、みりん干しなどでは思った以上の高評価が得られた。

今後は「アイゴ＝くさくて食べられない」という先入観を払拭し、地元での食用としての消費をはかり、アイゴの商品価値を高めることでアイゴ捕獲の効率を高め、さらには未利用資源の有効活用にもつなげていきたい。

そして、多くの人の努力によって我々の念願である榛南地区のサガラメ、カジメ群落が復活し、アワビやサザエが再び戻ってきたら、その海藻群落をいつまでも維持していけるように海の環境保全などにも気を配り、豊かな海を自分の後輩や次の世代に残していきたい。

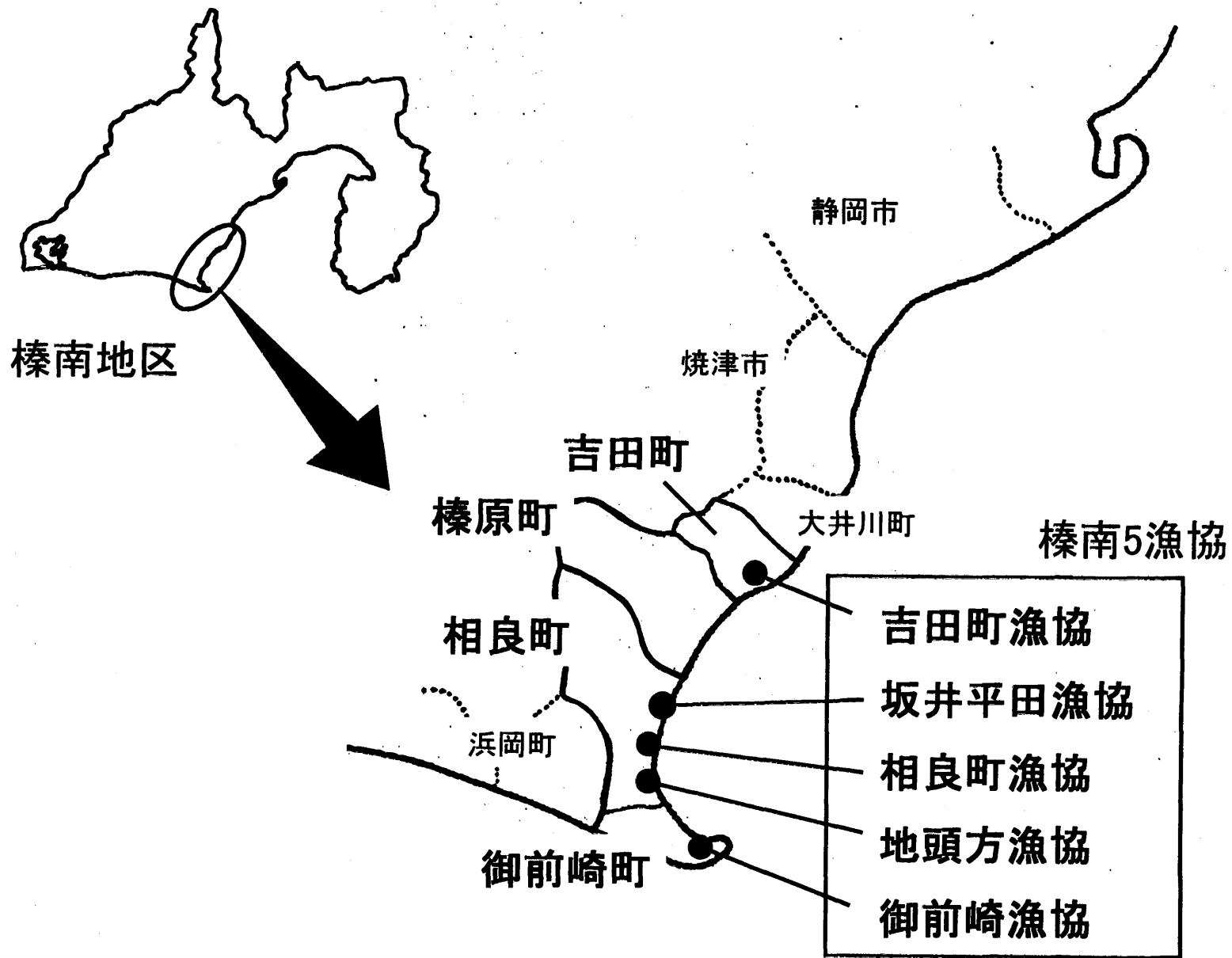


図1 榛南地区の位置と5漁協

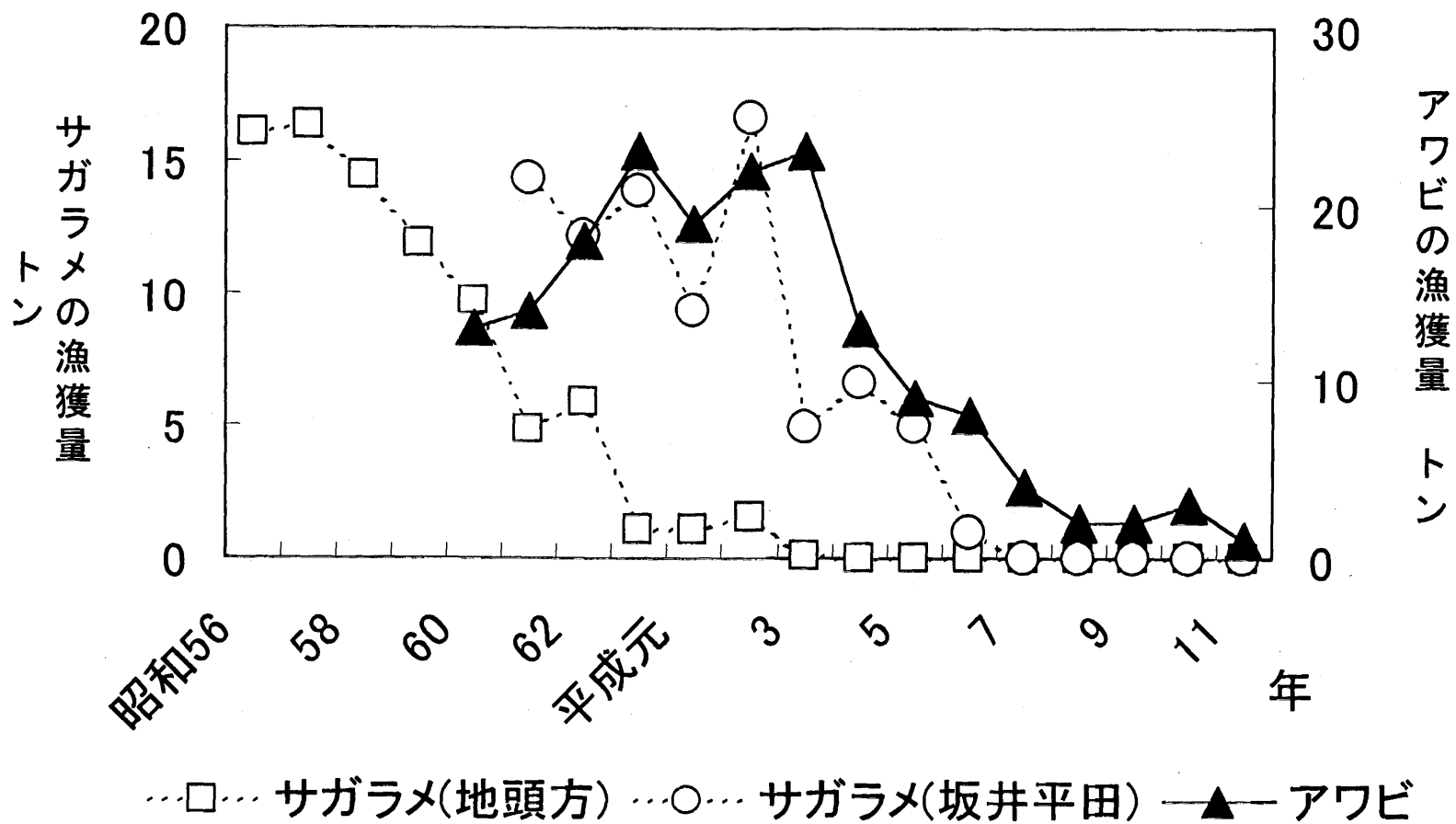


図2 サガラメ、アワビの漁獲量の変化

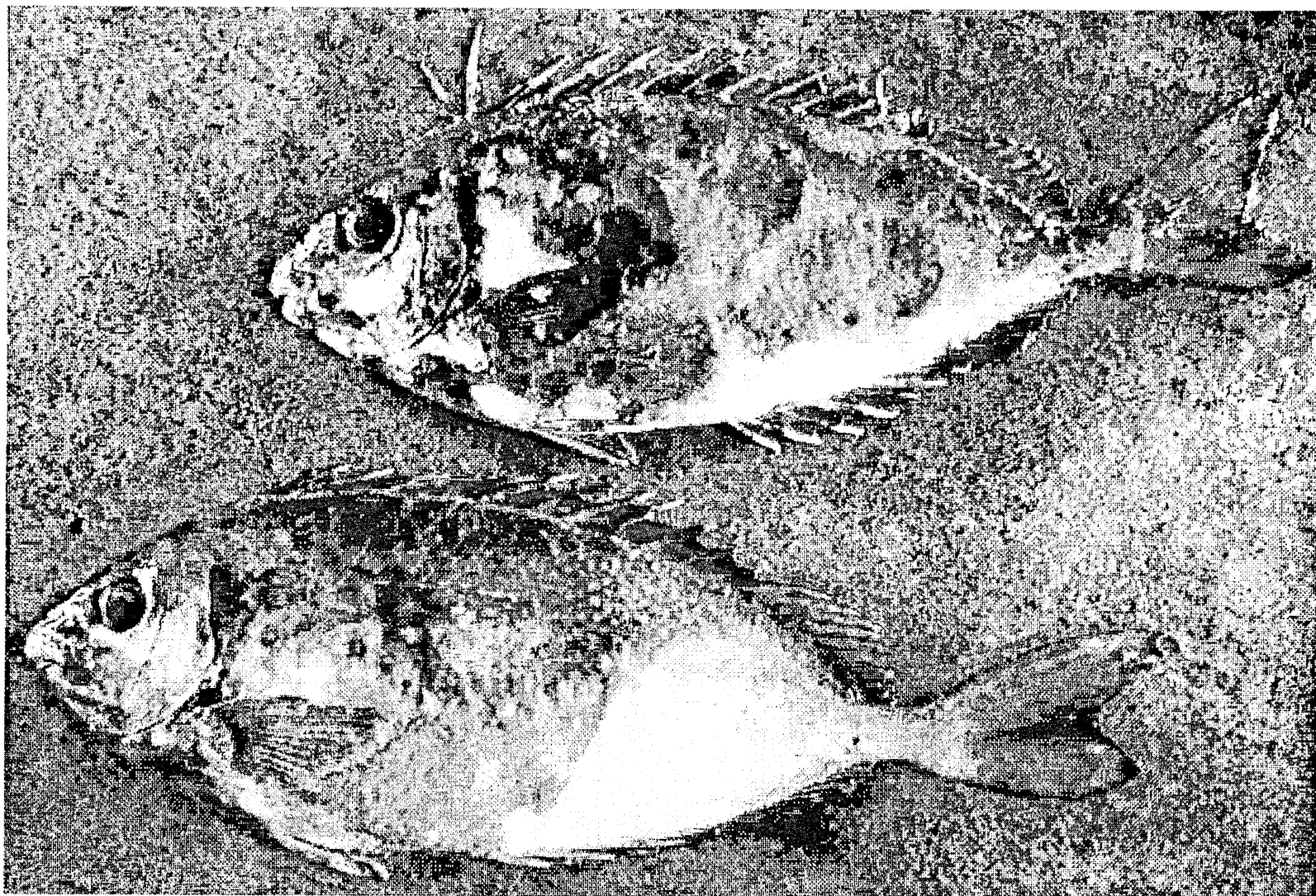


図3 捕獲されたアイゴ

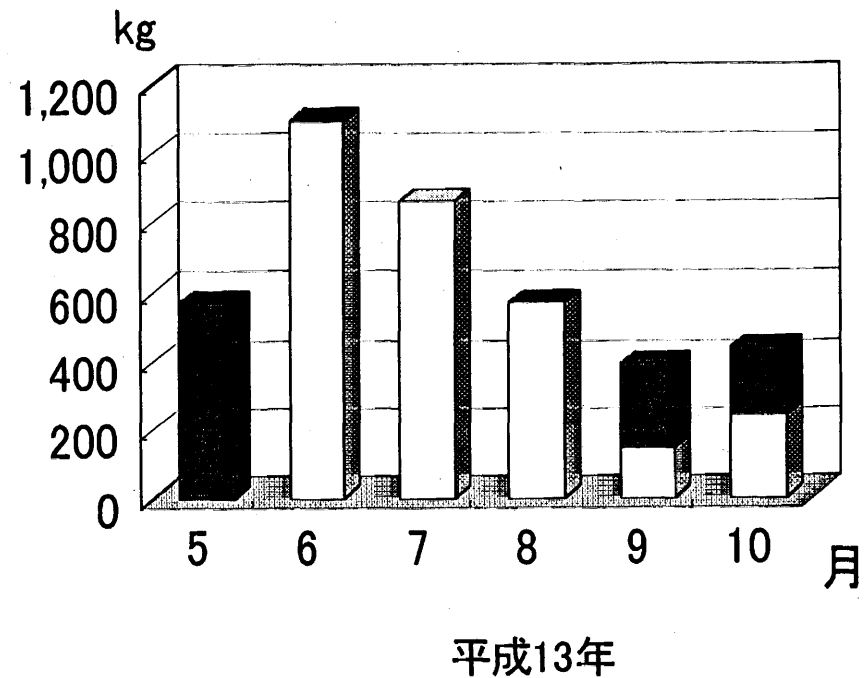
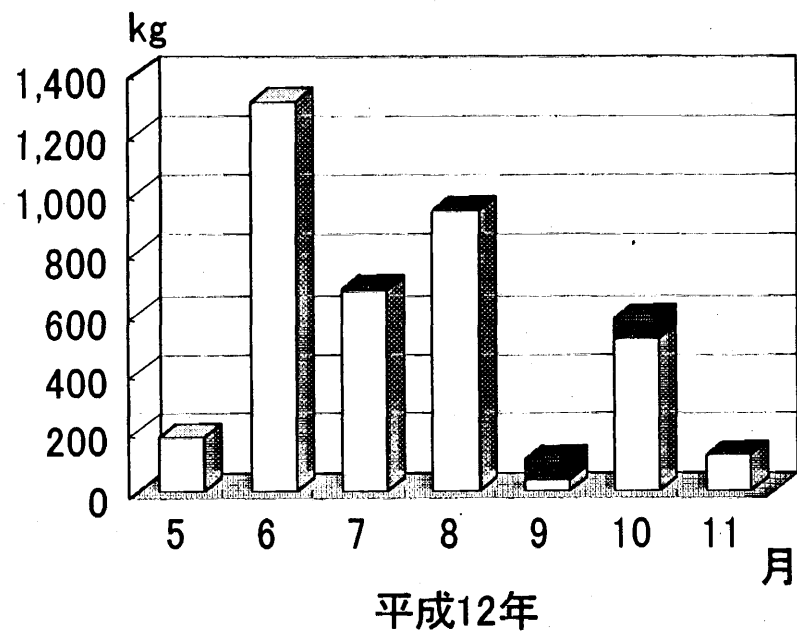
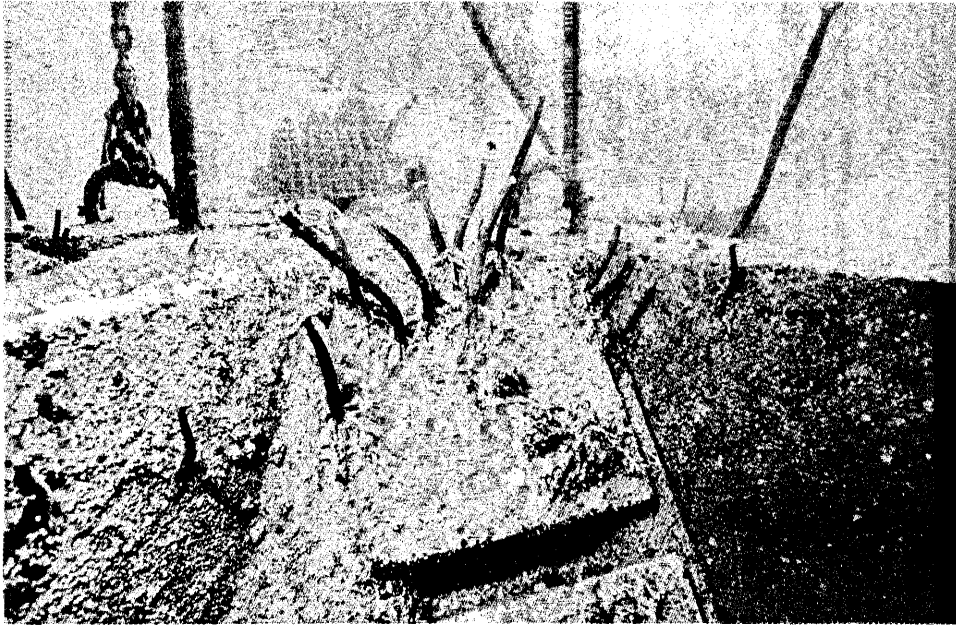


図4 アイゴ捕獲の成果 □ 定置網 ■ 刺網



捕獲前



捕獲後

アイゴ捕獲によるカジメ群落の変化